

4
番目の許婚候補
5

第1話 幸せと不安と

私こと上条まなみの土曜日の朝は、お仕置きから始まる――

「つて、ちょっと待ってください!」

私は必死に腕を伸ばして、迫ってくるたくましい身体を避けようとした。

こんな休日の始まり方があってたまるか……!

けれど、現に目の前では上司であり恋人でもある仁科彰人課長が、物憂げな笑みを浮かべて私に手を伸ばしている。正確に言うと、私を捕まえてのしかかろうとしているのだ。

「間違えたのは謝りますからっ」

必死に言い募るものの、あっさり捕まり、彼に組み敷かれてしまった。何も身につけていない自分の下腹部に何か硬いものが当たっていることに気づいて、私は息を呑む。

これって、これって……アレですよね!?

昨夜あんなに何度もイタしたくせに、どうしてこの人、こんなに元気なんだろう……

「いい加減に慣れてもよさそうなのに、どうしてこうも毎回間違えるんだろうね？」

彰人さんは笑顔で私を見下ろしている。でも笑っているからといって、機嫌がいいなどと解釈しちゃいけない。むしろ間違いなく不快に思っている証拠なのだから！

男性の心の機微に疎い私でも、さすがに五ヶ月も付き合っていれば、恋人の機嫌くらい分かるようになってくるというもの。怒った時は怒った顔をしてくれればいいのに、この人は怒れば怒るだけ笑顔になっていくのだ。

そして、今のこの笑顔。私の勘違いでなければ、目の前の人はかなり頭に來ているはずで……

彰人さんの弧を描いた唇が、恐ろしい言葉をつむぐ。

「お仕置きだね、まなみ」

「ひい！」

彰人さんの言う「お仕置き」が何を意味するのかは、下腹部に押しつけられているものが明確に示していた。

やっぱりこの展開か！

「え、遠慮します〜！」

私はぶんぶんと首を横に振って、彰人さんの腕の中から何とか抜け出そうとした。けれど、覆いかぶさっている熱い身体はビクともしない。

彰人さんはクスクス笑った。

「ねえ、まなみ。お仕置きされるのが分かっているながら毎回間違えるなんて、本当はこうされたいんだと解釈してしまうよ？」

「ち、違いますっ。つい癖で呼び間違えてしまっただけです！」

……ここまでくれば、私がなぜお仕置きされそうになっているのか、そして彰人さんが何に怒っているのか、お分かりいただけたことと思う。

そう。私はさつき寝ぼけて彰人さんを「課長」と呼んでしまったのだ。プライベートの時は「彰人」と名前で呼ぶように言われていたのに。もし間違えたら「身体に言い聞かせる」と宣言されていたのに。

そしてお仕置きは、はじめは数回に一度のキスで済んでいたのだけど、身体を重ねるようになってからは、間違えるたびにペナルティをとられている。しかも私が支払うのは、キスなんて軽いものじゃない。思いつきイヤらしいことをされるのだ。それこそ「身体に言い聞かされて」いるといつても過言ではない。一体どうしてこんなことになってしまったのか。

——そもそもの始まりは私の母方の親戚である三条家と、彰人さんの実家である佐伯家の間に持ち上がった縁談だった。昔からの約束で、私と従姉妹の舞ちゃん、真綾ちゃん、真央ちゃんのうち誰かが佐伯家にお嫁に行かなければいけないというのだ。

けれど私は他の三人と違って、お金持ちのお嬢様じゃない。だから最後の——四番目の許婚候補

だし、よもや順番が回ってくることはあるまいと高をくくっていた。

ところが就職した会社にたまたま彰人さんがいた。彼は佐伯の御書司だということを隠して働いていたのだ。そして私はなんと、その部下になってしまった。

彰人さんに許婚候補であることがバレたらまずいと思い、ずっと近づかないようにしていたのに、いろいろあつて恋人関係になってしまった。

縁談とは無関係なところから始まった恋だけれど、その縁談と、お互いに素性を秘密にしていることが（といっても私は彼の正体を知っているけど）、事態を複雑にしていた。

二人の付き合いが会社に、ひいては三条家や佐伯家の親たちにバレてはマズいのだ。なぜなら私を含めた三条家のイトコたちも彰人さんも、親たちが勝手に決めた縁談話に納得していないからもし私たち二人の関係を両家の親たちが知れば、その縁談が成立してしてしまう。これは彰人さんと従兄の透兄さんたちが協力して縁談を白紙に戻した今も、変わっていない。

だから私は今朝みたいに寝ぼけている時や、判断に迷った時には、とりあえず「課長」と呼ぶようにしている。だって、呼んではいけない場面だとつさに「彰人さん」と呼んでしまったら、取り返しがつかないもの。

でもそんなことを彰人さんは知らないし、私も説明できない。だから、彼は私がいつまで経っても役職で呼んでしまうことを、不満に思っているのだ。

「傷つくね。付き合い始めて五ヶ月も経つのに、未だに間違えられるとは。君の中ではまだ俺は恋

人というより上司なんだね」

「そ、それは……」

違うと言いたいけど言えなくて、私は口ごもる。そんな私を見て、彰人さんにはっこりと不吉な笑みを浮かべた。

「これはやっぱり、身体に言い聞かせないとね」

そう言うなり、彰人さんは片手をすつと下ろし、私の足の付け根に触れる。当然そこにも何もまどつていない。

「やつ、彰人さ、ん、んっ」

思わず、鼻にかかった感じの音が漏れてしまう。それは甘く、どこか誘うような響きを帯びていた。

とても恥ずかしい。なのに、反応せずにはいられない。

昨夜だってさんざん啼かされて、ぐったりしているはずなのに、私の身体は彰人さんに応えようとする。

「ふあ、や、だめ、実家に……帰らなくちゃ、なのに……あつ、んう、んんっ」

今日の午後は実家に帰る予定になっていた。ただでさえ寝坊して予定時間ギリギリなのに、こんなことを始めてしまったら……

彰人さんはゆっくりりと、それでいて官能を煽るように手を動かしながら、耳元で囁く。

「大丈夫。早く終わらせるし、仕度も手伝うよ。君はただ、横になっているだけでいい」
「……ああっ……！」

感じやすくなっている胸を濡れた唇と舌で愛撫されて、痺れるような快感に、私は息を詰める。
「や、あ、あっ」

頭がぼうつとしてきて、なぜさつきまであんなに抵抗していたのかすら思い出せなくなっていた。官能を揺さぶられて、私の頭の中から彰人さん以外のものが消えていく。

「……まなみ。愛してる」

胸から顔を上げた彰人さんが囁く。

「私も、私も、好き……」

私はそう呟きながら目を閉じて、彰人さんの肩に縋りついた。

「うー。彰人さんのバカ。彰人さんの絶倫」

私はベーグルをもぐもぐと咀嚼しながら愚痴る。

結局がつつり「お仕置き」されてしまい、彰人さんと一緒にマンションを出た時には、もうお昼に近い時間になっていた。

ゆっくりしている暇はないため、マンションの近くのベーグル屋でランチを取りながら、目の前に座る彰人さんへ恨み節を炸裂させる。

「何が『横になっているだけ』ですか。嘘つき！」

交わっている最中、突然身体を引っ張り起こされ、彰人さんの膝の上に座らされた。いわゆる対面座位というやつだ。快感に酔っていた私は拒否することなく、彼に言われるままに身体を動かして……

ああああ！ 思い出すだけで、恥ずかしさのあまり穴を掘って埋まりたくなる……！

おまけに、ただ横になっているだけで良かったはずが、体力をががつ削られてしまい、今の私はポロポロの状態だ。本音を言ってしまうえば、実家に戻らずこのままベッドに直行して、十時間くらい眠りたい。それをしないのは、彰人さんのいるマンションよりも実家の方が身体を休められると、身にしてみても分かっているからだっただけだ。

「だいたい休日っていうのは、心身を休めるためにあるはずですよ。なのに休むどころか平日より疲れてしまうなんて、どう考えてもおかしいです！」

彰人さんは私のその愚痴を、笑顔で一蹴した。

「平日より週末がいいと言ったのは、まなみ自身じゃないか」

「……ぐっ」

その通りなので、何も言えませんでした……。チクショーー！

ベーグルを食べ終わった後、実家に戻るためにそのまま駅へ向かう。駅は店のすぐ近くだし、わ

ざわざ送ってもらわなければならないと言ったのだけど、彰人さんは改札まで一緒に行くと言って聞かない。

私自身も何だかんだ言って彰人さんといいたいから、誰かに見られる可能性があるかと分かっているから、つい頷いてしまうのだった。

改札口で、彰人さんは名残惜しそうに、私の頬に触れながら言った。

「じゃあ、まなみ。気をつけて。明日、戻ってくる時にまた迎えに来るから」

「はい。では行つてきますね」

私は素直に頷き、頬に触れる彰人さんの手をきゅっと握った後、彼から離れて改札口に向かった。改札を通り抜けた後、振り返る。すると、そこにはまだ彰人さんがいて、私をじっと見つめていた。

眼鏡をかけて髪をセットし、スーツを着た彰人さんも格好いい。けれど、眼鏡をかけていなくて前髪も下ろしている私服姿の彰人さんは、うっとりするほど素敵だった。

美形の従兄弟たちを見慣れている私でもそう思うのだから、周囲の女性たちは、なおさら思うように違いない。改札口を行きかう女性たちが振り返ったり、見とれていたりした。

そんな中、彰人さんは私だけを見つめている。それをこそばゆく感じつつも、とても嬉しかった。思わず手を振ってしまったのは、彼の思いに応えたかったのと……自分でも意外だけど、周りの女性たちに、彼がフリーじゃないことを示したいと思ってしまったから。

すると彰人さんが、笑顔で手を振り返してくれる。とたんに女性たちの注目を浴びてしまったけど、なぜか気にならなかった。

彼との別れを惜しんでいたために、私は発車時間ギリギリで電車に乗り込んだ。空いている席に腰を下ろして一息つく。

——三条家と佐伯家の縁談が白紙に戻り、私と彰人さんが本当の恋人同士になったあの日から、三ヶ月近くが経っていた。

あれからというもの、お祖父ちゃんたちから結婚についてとやかく言われることもなく、私も従姉妹たちも、平和な日常を過ごしていた。

……いや、大きく動いたことが一つだけある。

なんと、舞ちゃんと涼が婚約したのだ。

といつても内輪でのことで、公にはしていない。イトコ同士ということもあるけれど、それ以上に涼の年齢のことが少しネックになっているみたい。若すぎる上に、まだ社会人経験が少ないというので、時期尚早だと判断されたようだ。

そんなわけで、涼が二十五歳になるまで公式な発表は控え、結婚もお預けになってしまった。

でも、それでも構わないと舞ちゃんは言う。

「あと二年の辛抱ですもの。それに、二人の付き合いはもう隠さなくてもいいし。堂々と傍にいら

れることが、とても嬉しいの」

幸せそうに笑う舞ちゃんの左手の薬指には、ダイヤモンドの指輪が光っていた。

一方、透兄さんと真綾ちゃんは、今も付き合いを内緒にしているみたい。

真央ちゃんは相変わらず現実の恋愛には興味を示さず、BLの世界に没頭している。

「私の最近のイチオシは、誘い受けよっ」

——などと言いつつ、イベント通いと同人活動に余念がない。……うん、真央ちゃんはいつでもどんな時でも通常運転だ。

そして私はと言えば、週末の過ごし方が少し変わった。

以前は土曜日の日中を彰人さんと一緒に過ごして、土曜日の夜に実家に帰り、日曜日にマンションへ戻るといふ生活をしてきた。だけど、今は金曜日の夜も彰人さんの部屋で過ごしているのだ。

もちろんそれ以外の平日も、彰人さんの仕事が忙しくなければ、夜はできる限り一緒に過ごす。

まあ、主に私が夕飯をおごってもらっているだけなんだけど。

金曜以外の平日は、彰人さんの部屋には行かない。私の部屋の前まで送ってもらうだけ。

彰人さんと、その……そういう関係になったばかりの頃は、食事に連れて行ってもらったら、そのまま彼の部屋に連れ込まれて、服を脱がされるってパターンが多かった。

しかも、彰人さん曰く「禁欲期間が長かった反動」とやらで、一回で終わることはなく……。数回ほど付き合わされた後、意識を失い、彰人さんの部屋で朝を迎えることも少なくなかったのだ。

おまけに朝っぱらから元気な彰人さんに、またいいようにされてしまつて……

今日みたいに土曜日ならまだいいけど、それが平日だったらどうなるか。……そう。当然、仕事に支障をきたすことになった。

だって、朝から疲労と寝不足でヨレヨレ、更に身体中の関節（主に足とか腰とか！）がギシギシ言つてる状態で、まともに仕事なんてできる？

ある日、とうとう耐え切れずに半日休むという事態になった私は、どうにかしなければと心底思った。いや、断りきれずについ応じてしまう自分も悪いんだけどね。

その時は課のみんなもまだ生暖かい目で見えていたけど、私が頻繁ひんぱんに休むようになりしたら、絶対に眉を顰しそめると思う。

そう思った私は、彰人さんに平日の夜はやめて欲しいと訴えたのだ。

『ごめんね』

彼もやりすぎたと思つたらしく、苦笑しながら謝つてくれた。

『仕事に支障をきたさないようにセーブするよ』

そうも言ってくれたけど、はつきり言つて信用できるか！ これまでも「もう一回だけ」とか言つて、結局何回もしたくせに！

仕事に関しては信頼も信用もしているけど、夜のことに関してだけは絶対に信用しちゃいけないと、私は早々に悟さとつていた。

だから彼と膝を突き合わせて話し合った結果——いや、正確に言えば土下座せんばかりに頼み込んで、月曜から木曜までは「自重」してもらうことにしたのだ。

その代わり、金曜日の夜は彰人さんの部屋で過ごすことになった。金曜日なら次の日は休日なので、多少無茶しても大丈夫だからって。

——それで万事解決だと思った。けれど、私は甘かったのだ。

できる日が少なくなる分、一晚あたりの回数が必然的に多くなることは予想していた。一晚に二回だったのが三回になる程度は仕方ないとも思っていた。

なのに、どうしてそれがいきなり四回に増えるとか、下手をすると朝まで解放してくれないとか、土曜日の真っ昼間からすることになるのでしょうか？

回数だけじゃない。内容もなんか、濃くなっているような……

ベッドの上で恥ずかしい体位を取らされるってことはまあ、置いておくとしても、リビングのソファの上でとか、台所で立ったままとか、シャワーを浴びている時に急襲されて、お風呂場の中とか！

……これ、絶対に初心者向きじゃないと思う。

ここに来てようやく、私はあれでも彰人さんがかなり手加減していたことを思い知ったのだった。しかも本人が爽やかに、けれどどこか色気のある笑みを浮かべながら言うには、「これでもまだ十分手加減している」らしい。

これでもまだ……。私は絶句した。彼が本気を出したらどうなってしまうのか、考えただけでも怖い！

いくら男性経験が少なかったり、恋愛や性に関する知識が乏しくたって、これくらいは分かる。

彰人さんは普通じゃない。絶対「絶倫」ってやつだ。

真央ちゃんが昔貸してくれたBL本に出てきた、ねちっこい攻キャラがそう言われていたし、同僚の水沢さんたちにそれとなく聞いてみたら、みんなそんなにたくさんしてないって言ってたもの。もっとも当の彰人さんは「恋人同士なら普通のことだよ」なんて、いけしゃあしゃあと言っていたけど。

恋人いない暦〃年齢で、自他共に認める恋愛音痴の私に、生まれて初めてできた恋人が絶倫だった——って、これが物語ならオイシイかもしれないけど、現実なのだから笑えない。

私はごく普通のソフトなお付き合いを望んでいたんだけどなあ……。いきなりこんな濃いお付き合いになるだなんて、夢にも思わなかった。

とは言うものの、彰人さんに抱かれるのが嫌なわけじゃない。これだけは声を大にして言っておきたいけど、彰人さんとういう関係になったことを、あの時彰人さんの手を取ったことを、後悔したことは一度もない。

……早まったかもとは、何度も思ったけど！

正直に言えば、彰人さんに触られること自体は好きだ。恥ずかしいことをいっぱいされるし、

毎回体力の限界を試されてるけど、抱きしめられるのも、キスされるのも、あの手で愛撫されるのも……すごく気持ちよくて、幸せな気分になれる。

終わった後、いつくしむように背中を撫でられている時や、夜中にふと目が覚めて、耳もとで聞こえる規則正しい鼓動と彼のぬくもりに気づいた時、泣きたくなるくらい幸せを感じてしまうのだ。私、いつの間にかこんなに彰人さんのことを好きになっていたんだろうって、自分でも不思議に思う。

けれど、その幸せに影を投げかけているものがあつた。

私はまだ彰人さんに、自分の素性——自分が三条家の親戚で、彰人さんの許婚候補の一人だったことを、明かしていないのだ。

幸せだと思うからこそ、なおさら伝えられなかった。惹かれれば惹かれるほど、好きになれば好きになるほど、不安や恐れが増していく。

彰人さんは私の素性を知っても、変わらず好きでいてくれる？

こんな大事なことをずっと隠していた……ううん、騙していたも同然の私を、許してくれる？

その自信はなかった。なぜなら私だって、舞ちゃんと同様に涼が付き合っていたのを教えてもらえなかったことに、あんなに衝撃を受けたのだ。なのに彰人さんは冷静に受け止めてくれるだなんて、どうして言える？

もしこれが彰人さんのために黙っていたのなら、まだよかっただろう。でも私が言わなかったの

は、保身のためだ。今も不安だから、怖いからって、口にできないでいる。

こんな私、きつと幻滅されてしまう。

そう思うと、ますます言えなくなる。幸せだと思っ一方で、罪悪感や不安もどんどん降り積もっていく。そんな悪循環に陥っていた。

* * *

日曜日の昼近く、私は実家で朝食兼昼食を食べていた。すっかり寝坊して朝食の時間に合わなかったから、たった一人で。実は最近はずっとこんな調子だ。

原因は前日の寝不足、つまり彰人さんのせいだ。

初めの頃は小言を言っていたお母さんも、最近は何も言わなくなってしまう。もしかしたら、私の寝坊の原因に気づいているのかもしれない。

自分ではよく分からないけど、同じ部署に所属する水沢さんや川西さんによれば、私は疲れた顔をしてはいるものの、肌はつやつやで、ただの疲労や体調不良とは違うのが明白なのだそう。

そう言われた時はちよつと戦慄したが、理由を根掘り葉掘り聞かれなかっただけマシだろう。

その点二人とも空気を読んでくれて助かっている。

「まなみは何時ごろ家を出るの？」

ご飯を食べ終わった私の前に、ミルクたっぷりのコーヒーを置きながら、お母さんが尋ねてきた。お父さんは今朝早く出かけてしまい、家には二人だけだった。

私は壁掛け時計を見つつ答える。

「うーん、あまり夜遅くになるといけないから、ここを四時くらいには出ようよ——」
そこまで答えた時だった。

——ピンポン。

玄関のチャイムが来客を告げる。実家のインターホンはマンションのとは違ってモニター付きではないから、誰が訪ねてきたのかは分からない。

「誰かしら？」

「あ、私が見てくるよ」

お母さんは洗い物をしていたので、私が代わりに玄関へ向かった。

「はい」

そう言いつつ玄関の扉を開けた私は、仰天する。

「こんにちは、まなみちゃん」

そこには彰人さんの祖母であり、私のお祖母ちゃんの親友でもあった美代子おばあちゃんが、数人のSPを引き連れて立っていたのだった。

「突然お邪魔してごめんなさいね」

リビングのソファに座った美代子おばあちゃんは、朗らかに笑った。そのすぐ後ろには、黒いスーツを着たSPの人たちが控えている。一人は男性で、残りの二人は女性だ。

うちみたいな一般家庭のリビングではあり得ないような光景だけど、幸か不幸かすっかり慣れっこになっている。

だってイトコたちを除けば、三条家のみんなもたいがい護衛の人や秘書みたいな人を引き連れてやってくるもの。もちろん親戚だけで話をする時は、彼らには別の部屋で待機してもらっているけれど。

今回も黒服さんたちに台所へ行ってもらってから、美代子おばあちゃんは口を開いた。

「来月は沙耶子ちゃんの誕生日があるでしょう？ でもあいにくその時期に検査入院する予定だから、ちょっと早いけどお祝いを届けにきたの」

そう言っただけで美代子おばあちゃんがテーブルに置いたのは、老舗高級和菓子店の銘が入った箱だった。

実は毎年お母さんの誕生日には、あちこちの親戚筋からこうしてお菓子が届けられる。

お父さんによれば、結婚した直後はものすごく高価な装飾品とかも届けられていたらしい。それを、お母さんは「私にはもう必要ないから」と言っただけで片っ端から送り返したそうだ。だけど、お菓子だけはもったいないからと言って手元に残したため、以来お母さんへの贈り物はお菓子ばかりに

なつたというわけ。

お菓子と言ってもお金持ちの人たちが選ぶお菓子だから、それはもうめつたに食べられない高級なものばかり。ご相伴しよばんにあずかる私はホクホクだ。

今回も箱を見た瞬間に私が目を輝かせたのを、美代子おばあちゃんは見逃みのがさなかつた。

「うふふ。まなみちゃんも食べてちょうだいね。この職人に特注して作ってもらったものなの」

老舗しんせ高級和菓子店の職人に特注……！

「ありがとう、美代子おばあちゃん！」

私は笑顔でお礼を言いながら、さすがお金持ちはやることが違うと感心していた。まあ三条家の親戚から届くのも、そんな高級お菓子ばかりなんだけど。

ちなみに、お母さん本人はその辺で売ってる普通のお菓子の方が好きだということは、みんなには内緒だ。

「そういえば、まなみちゃんとは全然会わなかったから、言ってなかったわね」

お互いの近況を報告し合った後、美代子おばあちゃんが不意に思い出したように言った。

「はい？」

「うちと三条家との縁談が白紙に戻ったことは、聞いたでしょう？」

「う、うん」

私は内心ドキリとしながら頷く。

「このことについては、まなみちゃんにも色々迷惑かけたと思うから、ずっと謝らなきゃと思つていたの」

「そ、そんな。私は別に……」

思わず首を横に振つた。この問題にずっと振り回されてきたのは事実だけど、矢面やおもてに立つてくれた舞ちゃんほどではない。

「それより美代子おばあちゃんの方が、その、ガツカリしたんじゃないかって……」

実は少し心配していたのだ。以前佐伯郎にお邪魔した時、美代子おばあちゃんが縁談に熱心な理由を聞いた。だから、縁談が白紙に戻ってどんなにガツカリしただろうって。

けれど、意外にも美代子おばあちゃんは明るく笑ってみせた。

「落胆はしたけど、全然平気よ。とりあえず一つの目的は達成できたのだから」

「え？」

縁談は白紙に戻ったのに……？

私が目を丸くしていると、美代子おばあちゃんとの話を黙って聞いていたお母さんが、ため息まじりに口を挟んだ。

「要するにね、おばさまやお父様たちは、あなたたち……いいえ、彰人君と透君が反発することを見込んだ上で、この縁談を進めていたのよ。まったく結婚しようとしないうちに彼らに危機感を与えるために」

「それって……」

その事実を知って驚いたけど、意外というわけじゃなかった。だって前に田中係長が推測していた通りだったから。

……どうやらドンピシャのようですよ、係長！

私は心の中でこそっと呟いてから、美代子おばあちゃんを見つめた。美代子おばあちゃんは何も言わず、にこにこ笑っている。つまり、お母さんの言ったことは……田中係長の推測は、正しかったのだ。

「それに、おばさまはもちろん、誰もガツカリしてなんかいないわよ。だって、まだ諦めていないんですもの」

「え!? 諦めていないって……もしかして、縁談を……?」

「やあね、沙耶子ちゃんったら、バラしちゃうなんて」

美代子おばあちゃんは笑顔のまま言った。どうやらこつちもドンピシャらしい。

……そういえば、すっかり忘れていたけれど、縁談が白紙に戻った直後に、透兄さんが懸念してたつげ。まだ完全には終わっていないって。

私は恐る恐る尋ねる。

「縁談は白紙に戻ったんだよね? でも本当はそうじゃないの?」

「いいえ、ちゃんと白紙に戻ったわ、まなみちゃん」

美代子おばあちゃんはそう断言した後、「でもね」と続けた。

「これは彰人さんにも透君にも言ったけど、あの子たちが自分で伴侶を選ぶための時間と猶予を与えただけ。それにもかかわらず以前と状況が変わらなかつたら、私たちはすぐにでも動くつもりよ」

「そ、そんなあ……」

これじゃあ、縁談が白紙に戻る前とまったく変わっていないということになる。ううん、二年間の猶予がなくなつた分、状況はもつと悪くなっているのでは……?

ああ、透兄さんはこのことを見越していたから、自分と真綾ちゃんの関係を公にしなかつたんだ。もし縁談話が復活してしまつたら、今度は自分たちが私や真央ちゃんを守る盾になるつもりで……

「舞ちゃんの次は真綾ちゃんが、その……許婚候補になるの?」

そう尋ねる私の顔は多分、曇っていたに違いない。美代子おばあちゃんは少し目を見張つた後、優しく微笑んだ。

「大丈夫よ、まなみちゃん。舞ちゃんのこと反省したから、あなたたちに無理強いはいしないつもりよ」

それを聞いて、私はホツとする。けれど次の美代子おばあちゃんの言葉で、安堵の気持ちはすぐに吹っ飛んだ。

「もちろん、眞子ちゃんの孫であるあなたたちにお嫁に来て欲しいという思いはまだあるわ。でも、

嫌なことを無理に押しつけたくはないの。大丈夫。社交界には他にも彰人さんに釣り合いそうなお嬢さんがいるから」

「……え？」

私の心臓が、やけに大きく音を立てた。

その言葉は美代子おばあちゃんにしてみたら、私を安心させるためのものだったのだろう。でも彰人さんの恋人である私にとっては、ものすごくショックな言葉だった。

……そうだ。今まで考えたこともなかったけれど、何も彰人さんの結婚相手は私たちじゃなきゃだめってわけではない。

私たちは美代子おばあちゃんの親友である眞子お祖母ちゃんの孫で、三条家なら佐伯家と家柄も釣り合っただよほどよかつたから、許嫁候補に選ばれた。ただそれだけの話で、社交界には彰人さんに相応しい女の人が、まだまだいる……

胸の奥がざわめいた。そんなの嫌だと言う気持ちと、仕方ないって思う気持ち、入り混じっている。

『一応忠告しておく。とつとと正直に話すんだな。無用なトラブルを招く前に』

透兄さんの言葉が脳裏をよぎった。

もしかして透兄さんが言ってた「無用なトラブル」っていうのは、このことを指していたのかな……。確かに私と彰人さんが付き合っていることを公表していたら、こんなことにはならなかつた。

たはずだもの。

ここで、お母さんがまた口を挟んだ。

「美代子おばさま……。縁談が白紙に戻ってから、まだ三ヶ月しか経っていないのよ」

どこか呆れたような口調だった。

「どうしてそう性急なの？ もつと時間をあげてよ」

「いいえ、沙耶子ちゃん。早く手を打たないと」

美代子おばあちゃんは首を横に振って、深いため息をついた。

「私だって、もつと時間をあげるつもりだったわよ。でもね、またあの子が同じことを繰り返そうとしているのであれば、放つてはおけないわ」

「同じこと？」

「……彰人さんね、恋人ができたみたい」

美代子おばあちゃんが低い声で告げた言葉に、私はドキッとする。

お母さんが、ちらつと私を見たのが分かった。そのことで、私が彰人さんと付き合っているって、お母さんにはとつとくバレていたのだと悟る。

お母さんには美代子おばあちゃんに視線を戻した。

「それはいい傾向なんじゃないの？ 彰人君は結婚について真剣に考えているのかもしれないわ」

「いいえ」

美代子おばあちゃんはまた首を横に振る。

「どうも、私に紹介する気はないみたいなの」

再び心臓がドクンと鳴った。続いて、わけの分からない胸の痛みに襲われる。

家族に紹介する気はない……。それって、それって……

「本気で結婚を考えているなら、家族に紹介したって構わないはずでしょう？ でも彰人さんは、『今はダメ』としか言わないの。きつと今までと同じよ。縁談を持ってこられたくないから恋人をとつかえひつかえして、時間稼ぎしているに違いないわ」

胃の奥がスーッと冷たくなる。

そうじゃないって言いたいし、思いたいけど……！

どうしよう。頭の中で色々な思いがぐるぐるしていて、ついでに胃の中のものもぐるぐるしてきて、気持ち悪くなってきた。

自分だってまだ結婚なんて考えてなくせに、彰人さんもそうだと知ったとたん、こんなに動揺するなんて。

その時、お母さんが何気なく私の背中に触れた。それは美代子おばあちゃんからは絶対に見えない位置だった。薄手のブラウスを通してぬくもりを感じる。

お母さんは私の背中に手を添えたまま、美代子おばあちゃんに言う。

「紹介しないからって、前と同じとは限らないわ、美代子おばさま。恋人ができたみたいとか、紹

介する気がないみたいって言い方をするということは、おばさま自身が彼の口から直接聞いたわけじゃないんでしょう？」

私はハツとして顔を上げる。

美代子おばあちゃんは、ばつが悪そうに肩をすくめた。

「……確かに彰人さんから直接聞いたわけじゃないわ。何しろ、最近佐伯邸にはめつきり顔を出さなくなつて、あれ以来彰人さんに会ったのは一回だけですもの。その時にあの子が言ったのは『付き合っている相手はいる。けれど、もう少し時間が欲しい』ってことだけ。紹介する気がないみたいってというのは、私の推測に過ぎないわ」

その言葉に、気持ちがすつと軽くなるのを感じた。我ながら単純だとは思う。

お母さんは私の背中をポンポンと叩くと、美代子おばあちゃんにっこり笑ってみせた。

「ほらね。恋人を紹介してくれないからって、前と同じことを繰り返していると決めつけるのはよくないわ。彼には彼の考えがあるのだから、もう少し長い目で見てあげて、おばさま。きつと母がここにいたら、同じことを言っていたと思うの」

「眞子ちゃんをよく、『美代子ちゃん、せつかちはよくないわ』って言っていたものね」

美代子おばあちゃんは懐かしそうに目を細める。けれど、その後ぼそつと呟いた言葉に、私とお母さんは言葉を失った。

「その眞子ちゃんも、あなたたちの花嫁姿を見ずに逝ってしまった。私にもどのくらい時間が残さ

れているのか分からない……。だから余計に焦ってしまっているのだと、自覚はしているの。でも、待つてあげられる余裕……。そんなにあるのかしら？」

美代子おばあちゃんを玄関先で見送った後、お母さんは私を振り返った。

「まなみ。ちゃんと彼と話し合いなさい」

お母さんが言ってるのは、おそらく素性を打ち明けなさいっていうことだろう。

「そ、そうしようと思っはいるんだけど……」

私は煮え切らない態度を取ってしまった。早く話すべきだと自分でも思う。でも美代子おばあちゃんと話をしたこと、自覚してしまった。ずっと騙していったせいで彼に嫌われてしまうかも……ということの他にもう一つ、自分の中にある恐れの気持ちを。

彰人さんが私を紹介する気はないみたいだと美代子おばあちゃんが言った時、私は傷ついた。けれど、同時に仕方ないとも思ったのだ。

だって、私は舞ちゃんたちみたいにお嬢様じゃないから。これまで彰人さんが付き合ってきた美人なキャリアウーマンたちとも違うから。

——つまり、彰人さんに相応しい相手じゃないから。

そんなネガティブな思いがどこからきたのか、私はもう知っている。私の中にある、どうしても拭い去れない劣等感が原因だ。

もちろん、彰人さんの気持ちを疑っているわけじゃない。時間稼ぎするために私と付き合っているわけじゃないことも明らかだ。だって彰人さんは私と付き合っていることを公表すれば縁談を壊せたのに、私のために思ってそれをしなかったのだから。

でも、私はどこか彼のことを信じ切れてない。

——彰人さんが私と付き合っていることを家族に告げないのは、私が自分に相応しい相手じゃないと思っはいるからでは？

そんな、うす暗い考えが湧いてくる。

彰人さんも、まだ私に素性を明かしていない。自分が本当は仁科彰人じゃなくて佐伯彰人であることと、佐伯家の御曹司であることを、明かしていないのだ。

つまり私たちは、お互い秘密を抱えたまま付き合っている。

私はそんなことを、お母さんにつつかえつつかえ語った。

すると、お母さんは苦笑した。

「普通なら、黙っはいるのは向こうも同じと開き直ってもいいのに……そうしないところがまなみの長所だとお母さんは思っはうわ」

「……そんな風に関き直るなんて、できないよ」

私はソファの上でクッションを抱きしめ、そこに顔を埋める。

どちらの非が多いかと問われれば、それは間違いなく私だ。私の方が何倍も罪深い。

なぜなら彰人さんは私の素性すじょうを知らない。でも私はとくに彰人さんの素性を知っている。それなのに、素知そちらぬ顔で恋人付き合っているのだから。

きっとこのことを知ったら、彰人さんは私に幻滅する。だって私自身、こんな自分を擁護ようごできないもの。

「でもね。ずっとこのままでいるわけにはいかないでしょう？」

「……うん」

私はクツションに顔を押しつけた状態で頷うなずいた。

このままでいいわけがない。このままでいられるはずもない。隠ひそしていても、いつか必ず素性は知られてしまうだろう。

「人に何かを隠ひそされていたとか、騙だまされていたとか知るの辛いことよ。特にそれを本人ではなくて、別の人から知らされるのはね。だからまなみ」

お母さんは私の頭をポンポンと優しく叩たたいた。

「手遅れになる前に、腹をくくって彼と話し合いなさい」

「……ん」

「あまり余裕はないかもしれないわ。美代子おばさまはせっかちだから、今度は何をやり出すことか……」

「……うん」

私は何度も頷うなずきつつも、逃げ出したくなるような恐れを感じていた。

マンションに帰るために実家を出て、駅へ向かう。そして電車に揺られながら、私はどうやって切り出そう、どうやって説明しようかと、ぐるぐる考えていた。

でも――

「まなみ」

改札口まで迎えに来てくれた彰人さんの顔を見たとき、「素性を明かさなければ」という思いがポーンと飛んで行ってしまふのを感じた。

代わりに湧わいてきたのは、疼いたくような胸の痛みと、喜びと、愛おしさ。

足早に改札を抜けて、彰人さんのもとへ急ぐ。

「お帰り、まなみ」

「彰人さん……」

笑顔で迎えられ、自分も笑顔を返しながら、私はまたしても逃げることを選択する。

「ただいま、彰人さん」

――もう少し、このままでいさせて。

――神様お願い、あと少しだけ。

けれど、神様には私のずるくて弱い心が伝わったのかもしれない。私はすぐに、このツケを払うことになったのだ。

第2話 知る時、知られる時

完全に油断していたのだと思う。私も、彰人さんも、そして透兄さんたちですら。

まさかこんなに早く事態が動くとは、誰一人予想していなかった。だからこそ、彼らの動向を把握することができなかつたのだ。

——それが起こつたのは、美代子おばあちゃんが訪ねてきた日の五日後の、金曜日のことだった。一週間後にはお盆休みに入るの、私は企業調査チームの仕事と秘書業務の両方で多忙を極めていた。

お盆休みは一週間。その間、会社は公的には休みになるものの、私が所属する事業本部が抱えているプロジェクトの進捗次第では休み中も働かなくてはならない。

そのプロジェクトに必要な資料の取りまとめや出張の手配、会議室の予約とやるべきことがいつ

ばいで、ようやく一息つけたのは午後三時を過ぎた頃だった。

マグカップを手に給湯室へ向かい、普段は入れないお砂糖たっぷりのカフェオレを作る。いつもだったら部署に戻って自分の席で飲むのだけれど、しばらくパソコンの画面を見たくない気分だった私は、給湯室で立ったままカフェオレをすすった。

一口飲んで、ふうと深い息を吐く。

どうなることかと思っただけれど、何とか今日の分の仕事を終わらせるめどがたった。急な仕事が入らない限り、残業は最小限に抑えられるだろう。私も、彰人さんも。

私は彰人さんの、この後の予定を思い浮かべる。確か、これから社内会議が一本入っているはずだ。といっても、彰人さんがやるべきことはない。プロジェクトの責任者である金田主任が、関連部署の責任者たちに色々説明する。彰人さんはそれに付き添い、見届けるだけだ。

秘書業務を任されている私も、会議前に人数分のお茶を用意して、最後に後片付けをするだけ。会議に必要な資料は他の女性社員が作成し、配布も彼女が行うため、私がやるべきことはなかった。だからお茶を会議室に届けた後、会議が終わるまでの間は、彰人さんから頼まれていた稟議書を作成してしまおう。そう思いつつマグカップを手に給湯室を出て、すぐのことだった。

彰人さんが携帯電話を耳に当てて何事か話しながら、部署のガラス戸を開けて出てきたのだ。彼は私に気づいて、眼鏡の奥の目を瞬かせた。けれど、すぐに目を逸らし、会話の方に集中する。

「突然すぎますよ」

その声も顔も妙に真剣で、何だか深刻そうに見えた。

仕事のことで何かあったのかな？

私は気にしつつも、彰人さんの横を通りすぎて部署へ向かう。心配だったけれど、立ち聞きするわけにはいかなかった。だってわざわざ廊下に出てきたということは、他の人に聞かれたくない話なのだろうから。

けれど、ガラス戸の取っ手に手をかけた時、ふとあることに思い至った。

さつき彰人さんが耳に当てていた携帯電話は会社から支給されているものではなく、プライベート用のものだった。

思わず振り返った私の目に、携帯を耳に当てたまま苦々しい表情を浮かべる彰人さんの姿が映る。会社でもプライベートでも、めったにしないほど険しい表情だった。驚く私の耳に、表情と同じように苦々しい彰人さんの声が聞こえてくる。

「いい加減にしてください。今は仕事ですよ。あなた方のおふざけに付き合っている暇はないんです！」

彰人さんは苛立たしげに通話を切ると、びっくりして固まっている私に声をかけた。

「……ああ、驚かせてすまない」

気持ちを落ち着かせるためか、深い息を数回吐いてから、こちらに歩いてくる。

「何かあったんですか……？」

彼はガラス戸を押し開け私を先に通しながら、小さい声で答えた。

「親戚から電話がきたけど、たいした用件じゃなかった」

「そう、ですか……」

でも彰人さんの様子から、たいした用じゃなかったようには思えなかった。私は妙な不安に襲われて彰人さんを見上げる。

目が合うと彼は、ふっと表情を緩めた。

「年寄りだから、いちいち大げさなんだ。こっちは仕事なんだというのに、お構いなしだからね。困ったものだ」

年寄りって……それって、美代子おばあちゃんのこと？

三条家と違って、佐伯家の親類は多くない。彰人さんの祖父である孝彰おじいちゃんは、戦争で家族の大半を亡くしてしまったからだ。そして今現在、佐伯家の親類でお年寄りと呼べるのは、美代子おばあちゃんしかいない。

美代子おばあちゃんが、仕事中に連絡を……？

確かに人のことはお構いなしといった感じのところはあるけれど、ちゃんとTPOを弁える人だ。なのに、仕事でと分かっている時間帯に、わざわざ電話をかけてくるなんて……

「心配はいらない。仕事が終わった後にでも、こっちから連絡入れとくよ」

「はい……」
そう言いながらも、私は何か嫌な予感がしていた。

仕事に戻った私は、ひとまず目の前のことに集中した。メールをチェックしたり、プリントアウトした資料をキャビネットに保管したりしているうちに、胸騒ぎを覚えたこともすっかり忘れていた。

彰人さんもいつものように、テキパキと仕事を片付けている。

そんな時に、一本の電話がかかってきた。

外線とは呼び出し音が違うので、外線であることがすぐに分かる。秘書業務をやっている習い性か、とつさに受話器を取っていた。

「はい。新事業推進統括本部の上条です」

『秘書課の日向さん……？』

受話器からは、きびきびとした女性の声が聞こえた。

「はい。今代わりますので少々お待ちください」

私は保留ボタンを押して受話器を置いてから、課長席で資料をめくっていた彰人さんに声をかける。

「仁科課長、外線一番に秘書課の日向さんからお電話が入っています」

「秘書課の日向さん……？」

顔を上げた彰人さんは、怪訝そうに眉を顰めた。不思議に思うのも無理はない。うちの部署が秘書課と関わることはめったにないからだ。

——秘書課の日向さん。直接話をしたことはないけれど、その名前と役職、それに顔も知っていた。

彼女は秘書課の課長代行で、あまり頼りにならないと噂される男性の課長に代わり、秘書課の女性社員たちを束ねている。歳は、多分三十歳くらいだと思う。

二十代のうちに結婚退職する人が多い秘書課に長く在籍しているため、一部の人たちにはお局だの何だの言われているらしい。けど、本人はそんな言葉が似合わないきりつとした美人で、キャリアウーマン風の容姿をしている。実際、仕事でもかなり有能だと聞く。

今は後進に道を譲っているけれど、社長——当時は副社長だった——の秘書を長く続けたことからも、それは明らかだった。

役員付きの専属秘書には、秘書課の中でもほんの一握りの人しかなれないらしい。優れた容姿や秘書としての能力だけでなく、どんな事態にも対応できる機転や冷静さも要求されるからだ。

そのため、役員専属になるとするのは、秘書課の中では最高のステータスなのだとか。それをあつさり人に譲ってしまったことから、並の女性じゃないことは確かだ。

その秘書課の日向さんから、直々に連絡が……？

私は忘れかけていた不安が戻ってくるのを感じた。

彰人さんが受話器を取って、内線ボタンを押す。

「代わりました。仁科です。……ええ、それは承知しますが……」

彰人さんの表情が、どんどん苦々しいものになる。私だけでなく、周りの同僚たちも仕事の手を止め、不安そうな顔で彼を見ていた。

「しかし、今は就業中で……。ええ、ですが……」

彰人さんの表情が次第に険しくなっていく。相当難しいやり取りが行われているようだった。

「何か面倒なことが起こってるみたいね」

隣の席の水沢さんが、誰に言うともなしに呟いた。

実は新規事業の計画や準備をしている我が部にとつて、秘書課からの連絡というのはとても重大な問題になりかねない危険を孕んでいる。最近はないけれど、重役の鶴の一声で計画していた事業が白紙に戻ったり、大幅に計画を変更せざるを得なかったことが、過去に何度かあったのだ。

そういった連絡は部長を通して私たちに伝えられるんだけど、その部長は今、出張で留守にしている。だから、課長である彰人さんに連絡が入ってもおかしくない。秘書経験が豊富な日向さんは、その繋ぎ役として電話をかけてきたのかも。

そうでないとしても、どんどん渋い表情になっていく彼を見る限り、決して良いニュースでないことは明らかだった。

「ですが、今は……。ええ、はい。分かりました。……社長がそう仰るならば」

その言葉に私たちは仰天して、顔を見合わせる。

社長!? 電話の相手は社長なの!?

「……はい。ではすぐに伺います」

最後にため息まじりで答えると、彰人さんは静かに受話器を置いた。それから顔を上げた彼は、私たちが固唾を呑んで見守っているのに気づき、ふっと表情をゆるめた。

「大丈夫だ。今やっているプロジェクトとは別件の話だから、安心していい」

その言葉に、部署のみんながホッと安堵の息を漏らした。

「ただ少し社長に用があるから、しばらく席を外す。上条さん」

「は、はい」

突然名前を呼ばれた私は慌てて姿勢を正した。

「すまないが、この後の俺の予定は全てキャンセルしてくれ。確か社内会議と書類のチェックだけだったはずだ」

「はい」

そう答えながら、私はマウスを操作してパソコンの画面上で彰人さんの——うん、「仁科課長」の予定表を開いていた。

「仁科課長の仰る通り、この後は社内会議と書類チェックだけです」

うちの課では社内システムを使って社員のスケジュールを管理していて、誰でも閲覧えつらんできるようになっていた。各々別のプロジェクトを抱えて動いているため、同じプロジェクトのメンバーでない限り、相手の予定どころか現在の居場所すら把握するのが難しいからだ。

特に管理職は分刻きざみの予定になることもしばしばなので、このスケジュール表がなければ、会議の予定などが立てにくい。

「金田。俺がついてなくても大丈夫だな？」

彰人さんは社内会議に一緒に出る予定だった金田さんに声をかける。

「は、はい」

金田さんは椅子から立ち上がりながらそう答えたものの、少し不安げだ。

今回の会議では金田さんがプロジェクトの進捗状況を、関連部署の担当者や責任者に説明する予定になっている。社内の人たちを相手にしたものだからそんなに気負わなくていいはず。だけど、彼がプロジェクトの責任者になったのは今回が初めてなので、不安になるのも無理はないと思う。

多分、会議で何かあつたら、彰人さんのフォローが入るのを期待してたんじゃないかな。

それを見越していたのか、彰人さんは苦笑する。

「心配するな。会議には田中係長に出てもらうから」

「へいへい」

田中係長も自分が代理になることを予想していたのだろう。軽い口調で返事をする、椅子から

立ち上がった。

「プロジェクトの概要は知っている。今日の発表の要点と他に押さえておくべきことを教えてくれるらあ、後はやっておくよ」

「すまない」

彰人さんが田中係長に言った。

私は今度は田中係長の予定表を開いて、彼のスケジュールを確認する。

……うん、大丈夫。係長には他の会議の予定も、他部署に出向く用事もない。

「課長。課長に代わって係長が会議に出る旨、他の出席者に連絡しておきますね」

私は会議の出席者を確認しながら、彰人さんに声をかけた。

「すまない、頼む」

彰人さんは私に向かって小さく微笑んだ後、田中係長とすり合わせをするためか、書類を手にフロアの端はへ向かう。そこは事務机とパイプ椅子がポツンと置かれていて、簡単な打ち合わせなどに使っている場所だ。

私は二人がパーテーションの向こうへ消えていくのを、不安な気持ちで見送った。

すり合わせ程度なら課長の机でもできるはずなのに、あえて誰にも聞かれない場所で話し合おうとしている。

社長からの電話はプロジェクトの話じゃなかった。……じゃあ、一体何？

「上条ちゃん？」

水沢さんから怪訝そうに呼びかけられ、私はハツとする。

「あ、何でもありません！ 電話しますね」

私は雑念を追い払い、受話器に手を伸ばした。

そう。会議まであまり時間がない。今は目の前の仕事を片付けないと。

内線番号を押した後、深呼吸をして気持ちを落ち着かせながら、私は電話の相手が出るのを待った。

社長室に向かう彰人さんを見送り、それから会議に向かう金田さんや田中係長たちも見送った後、私はふうつと大きく息を吐いた。

「お疲れ様、上条ちゃん」

川西さんがやってきて、私の机にスポーツ飲料のペットボトルを置く。

「方々に連絡しまくって、喉渇いたでしょう？ 奢ってあげる」

言われたとたんに喉の渴きを自覚した私は、川西さんの厚意に甘えることにした。

「すみません。いただきます」

キャップを外して一口飲んだらやけに美味しく感じて、私はごくごくと喉を鳴らしながら飲み下していく。

やがてペットボトルから口を離し、ほう……と満足げに息をついていたら、川西さんがクスクス笑った。

「おいしそうに飲むよね、上条ちゃんて」

「え？ そ、そうですか？」

実は同じようなことを彰人さんからもよく言われていたりする。私は美味しそうに食べたり飲んだりするから、奢り甲斐があるんだって。

どうやら彰人さんの歴代の恋人たちはスタイルを気にして、少ししか食べなかったらしい。だから、毎回出てきたものを残さず食べる私を見ると、彰人さんは嬉しくなるのだそう。

だってもったいないし、残したら作った人に失礼じゃない？

私はそう思うのだけど、食事を残す女性たちと付き合ってきた彰人さんは私と出会うまで、それが当たり前だと思っていたんだとか。

それを聞いた時は、庶民丸出しの自分が恥ずかしかった。けれど、今はそんな女性とばかり付き合ってきた彰人さんを心配する美代子おばあちゃんの気持ち、ほんの少しだけ分かる。

なぜなら付き合ってきた女性のタイプが、あまりにも偏っているから。あんなにモテるのに、いつも同じようなタイプの人ばかり選んできたのには、作爲的なものを感じる。彰人さんは彼女たちに対して好意は持っていたかもしれないけど、特別に好きなわけじゃなかったというのだから、なおさらだ。

それを誰よりもよく知っている美代子おばあちゃんだからこそ、余計に心配しているのだろう。そして、その美代子おばあちゃんは彰人さんが変わったことを、まだ知らない――

「ねえ、上条ちゃん」

川西さんは急に声のボリュームを落として私に尋ねてきた。

「さつき会議に行く直前、係長が上条ちゃんに、何か言っていたわよね？ あれは何て言っていたの？」

そう。実は田中係長がさつき通りすがりに私の椅子の真横で足を止め、こそっと声をかけていたのだ。係長と付き合っている川西さんは、それに目ざとく気づいたようだった。

「それが……」

私は係長の言葉を思い出し、戸惑いながら答える。

「時間切れだつて。だから、覚悟を決めておけて……」

最初は仕事のことかと思った。係長に頼まれていた仕事があったのに、私がそれをすっかり忘れてしまっていたのかと。でもいくら記憶をたどっても思い当たることはなくて、係長が何のことを言っていたのかさっぱり分からないのだ。

「時間切れねえ……。何か当てはまること、あったかしら？」

川西さんが首を傾げる。この人にも心当たりがないということは、企業調査チームの仕事とは関係ないようだ。だとすれば、秘書業務の方……？

その時、川西さんが「あ」と言った。何かに気づいたらしい。

「……一つだけ心当たりがあるわ。というか、これしか考えられない」

「え？ 何ですか？」

川西さんはキョロキョロと周囲を見回し、隣の席の水沢さんがちょうどお手洗いに行っていることと、誰も私たちに注目していないことを確認すると、かろうじて聞こえるくらいの小さな声で囁いた。

「上条ちゃんの素性のことよ。まだ言えてないんでしょう？」

「あ……」

私は目を見開く。

田中係長と川西さんも、なるべく早く彰人さんに素性を打ち明けた方がいいと忠告してくれていたのだ。なのに私が怖がつて、今までずるずると先延ばしにしている……

——それが、時間切れになった？

私はヒヤリとする。

「もしかしたら課長の実家の方で、何か動きがあったんじゃないの？ それを知って、歴史——係長はそんなことを言ったんじゃないかしら」

「佐伯家で何か動きが……？」

先日の美代子おばあちゃんの話の思い出す。さつき廊下で誰かと電話していた彰人さん。やっぱり

り、相手は美代子おばあちゃんだったの？

その時とつきに思い浮かんだのは、業を煮やした美代子おばあちゃんが、三条家とは関係ない女性を新たな許婚候補に選んで、彰人さんに押しつけようとしているのでは……という考えだった。そして強く思った。

——彰人さんが知らない誰かと婚約してしまうなんて、そんなの絶対に嫌だ……！
ううん、たとえば大好きな三条家の従姉妹たちになつて、彰人さんは渡したくない。

私は胸の前で両手をぎゅっと握り、呟いた。

「私、今日仕事が終わったら、彰人さんに言います」

いつまでもぐずぐずしているから、こんなことになってしまったのだ。

『どうやら時間切れのようだ。覚悟を決めておけ』

……そう、田中係長の言う通りだ。

「ええ、その方がいいと思うわ」

川西さんが微笑む。彼女も、そして田中係長も、ずいぶん前から忠告してくれていた。そんな二人にとって、私の煮え切らない態度はどんなに歯がゆかったことだろう。

それでも、打ち明けるのが怖いという私の気持ちを理解して、決心がつくまで静かに見守っていてくれたのだ。

「ありがとうございます、川西さん」

「やあね、お礼を言われる覚えはないわよ」

川西さんは朗らかに笑って否定する。けれど、ずいぶん前から——そして今この瞬間も川西さんやみんなに守られていたことを、この時の私はまだ知らなかった。

「打ち明けると決めたのなら、チャッチャと仕事を終わらせましょう」

「はい！」

私は笑顔で答えて椅子から立ち上がった。田中係長たちがいる会議室に、お茶を届けるために。ところが立ち上がった直後に電話が鳴った。この呼び出し音は内線だ。

私は手を伸ばして受話器を取る。

「はい。新事業推進統括本部の上条です」

「上条さん？ ちょうど良かった」

電話をかけてきたのは、なんと彰人さんだった。

『すまないが、今すぐVIP用会議室の横にある準備室まで来てもらえないか？』

「え？」

思いもかけないことを言われて、私は目を丸くする。

『お茶出しが必要なんだ。悪いけど、こつちを優先して欲しい』

「わ、私が、ですか？」

戸惑いが、きつと声にも顔にも出ていることだろう。

「で、でも、あそこは秘書課の管轄で……」

『秘書課には話を通しておくから、セキュリティカードを借りて、準備室に来て欲しい。……頼む』

その最後の言葉を聞いて、私は腹をくくった。

「……分かりました。秘書課で鍵をもらってきます」

『ありがとう』

受話器を置いて、怪訝そうな顔で聞いていた川西さんに説明する。

「VIP用会議室？ それは変ね」

やはり私と同じことを考えたらしく、川西さんが首を傾げた。

うちの会社の最上階には、社長や副社長をはじめとした重役たちの部屋と秘書課の他に、VIP用の会議室と豪華な応接室がある。もちろん重役たちが他社のお偉いさんたちを招いて使うためのもので、一般社員は近づくことができない。

そのVIP専用会議室と応接室の間には、準備室と呼ばれる小部屋がある。準備室はどちらの部屋にも通じていて、お茶やお菓子など、お客様をもてなすためのものが揃っているらしい。私たちが使う給湯室の豪華版のようなものだろう。

その部屋を使用するのは秘書課の人たちで、管理も秘書課が行っている。だから今回お茶を準備するのだから、本来なら秘書課の誰かがやるべきなんだけど……

いくら秘書業務をやっているとはいえ、私のような他部署の人間がしゃしゃり出ていったら、秘書課の女性陣からの反発は必至だ。

「上条ちゃんにお茶を入れさせたりしたら、秘書課のやつらにますます目をつけられることなんて、課長なら分かるはずなのにね」

川西さんが顔を顰める。

秘書課には彰人さんのファンが多いので、彼女たちの私に対する心証はあまりよくない。

元々彼女たちは彰人さんの近くで仕事をしている女性社員を嫌っている節があるけれど、その中でも特に私は目の仇にされているようだ。何回か彰人と噂になった上、彼がよく私を構うせい、いかにも親しげに見えるらしい。

廊下ですれ違う時に嫌味を言われることがあるし、陰でコソコソ言われているのも知っている。変なメールが送られてきたことだってある。

そんな中で、彼女たちの仕事を奪ってしまうわけでしょうか？ そりゃあ反発されたり憤慨されたりするのは、もはや避けられない事態だ。でも――

「頼むって、言われたので」

彰人さんのあの時の口調は、普通に仕事を頼む時のものじゃなかった。もちろん、仕事は仕事なんだけど、どこか必死というか、哀願している風に聞こえたのだ。

「多分、秘書課の人には頼めない理由があるんだと思います」

でなければ、秘書課の人たちから反発を食らうリスクを冒してまで、私を介入させることはしなかつたはず。

川西さんは「そうね」と頷く。何か思い当たることがあるようだ。「多分、問題行動の多い秘書課の連中を近づけたくないでしょう」

問題行動と聞いて思い出すのは、彰人さんが引越すたびに住まいを見つけて出しては、ストーカーまがいの行為をしている人たちがいるという話だった。みんなうちの会社の女性社員だということから、その中には秘書課の女性も含まれているかもしれない。

確かに、そんな女性をわざわざ近づけたくないだろう。それに、誰が彰人さんにお茶を持っていくかで無用な争いが勃発しそうだ。

「プロジェクト会議へのお茶出しは私が代わりにやっておくから、とりあえず上条ちゃんは秘書課に向かいなさいな」

親切な川西さんが、助っ人を申し出てくれた。

「すみません、川西さん。お願いします」

私は川西さんにそっちの方を託して、最上階へ向かった。

「すみません、新事業推進統括本部の上条です。準備室のセキュリティーカードを貸していただけませんか？」

秘書課に赴き、勇気を出して声を出したとたん、部屋の中にいた十数人の目が一斉に向けられた。敵意のある目、怪訝そうな目、すぐに興味をなくして逸らされた目と、様々だ。

おそらく私を見て顔を顰めたり、睨んだりしている人たちは、彰人さんの熱烈なファンなのだろう。十数人のうちの約半数が、それに当たる。あとの半数は彰人さんに興味がないか、恋人や婚約者がいる人たちだと思う。

一番奥の机に座っていた女性が立ち上がった。

秘書課と受付係は、この会社の顔とも言わべき存在なので、容姿が優れていて仕事もできる女性が集まる。立ち上がった女性も例外ではなく、従姉妹たちや川西さんといった美女を見慣れている私の目にも、相当な美人に見えた。

美しいのは顔だけではない。落ち着いたスモークピンクのスーツに包まれた肢体は魅力的なラインを描き、見事なまでのプロポーションをしていた。

私はこの人を見知っている。さっきうちの部署に電話をかけてきた秘書課の課長代行、日向力オリさんだ。

やや褐色の髪をきりつと結び上げた日向さんは、優雅な物腰でこちらに近づきながら、敵意も好意も感じられない口調で言った。

「あなたが上条さんね。仁科課長から伺っています」

目の前まで来た彼女は、一枚の白いカードを私に差し出す。